

事例研究

自閉症児の要求言語行動の形成に関する研究

藤 原 義 博 *

かなり豊富な語いを持つにもかかわらず、その機能的使用に乏しい自閉症児の実験観察を通して、機能的な言語行動である要求言語行動を形成するための要因について次の2点より検討を試みた。即ち、①言語的ニーズに係る物理的環境要因として、欲求対象物を自己充足出来ないかあるいは困難な状況を設定し、その環境統制の差異による欲求充足行動の変動とその反応型について検討した。②メディエーターたる欲求充足者の対応を変数として欲求充足行動の変容について検討した。その結果、要求言語行動を形成する要因として、欲求対象物を統制し自己充足が困難な事態を設定することによって言語的ニーズを高め、そこで示す子どもの欲求行動をメディエーターが的確に捉え、即時に対応することの重要性が示唆された。また、その学習の成立要因として、受容的充足過程を十分に体験することの重要性と、メディエーターたる他者の機能の重要性が示唆された。

キー・ワード：自閉症児 要求言語行動 マンド

I. 問題および目的

現在、自閉症児に対する音声言語行動の形成においては、日常場面での自発的で機能的な言語の使用を確立することが重要な課題となっている。言語行動の中で、最も機能的で実用的な言語行動は、要求言語行動であろう。Skinner(1957)³⁾は、言語行動をタクトとマンドに分類したが、要求言語行動はそのマンドに当たる。マンドは、話し手に係る先行条件(摂食制限や嫌悪条件)によって自発され、その言語行動によって強化因を特定化し、その特定化した強化因を聞き手が提示することで強化され、維持される言語行動である。即ち、「マンドは直接自己の欲求に基づく行動」(Winokur,1976)⁶⁾であり、その生起によって自己の欲求が充たされることで強化され、維持される言語行動であり、それ故に機能性実用性の高い言語行動と言えよう。そこで、Sosneら(1979)⁵⁾を始め、自発的で機能的な言語行動の形成を目指した一連の研究では、この要求言語行動をその標的行動として取り上げている(Halle et al.,1981¹⁾;Hart & Risley, 1975²⁾; Rogers-Warren & Warren, 1980⁴⁾)。

これらの研究では、偶発的教授法(Hart & Risley, 1975²⁾)に代表されるように、保育園や施設の食事場面や遊戯場面などの実際の場面を用いて、そこで使用する事物を物理的に操作して日常場面での言語使用の機会を増そうとする点で共通している。しかし、その機会を捉えて行われる言語の教授法には若干の相違がある。偶発的教授法やマンド・モデル法(Rogers-Warren & Warren, 1980⁴⁾)では、子供の言語反応を促すために訓練者の音声言語手掛り(“What do you want?”, “What is this?”)を使用しているのに対して、Halleら(1981)¹⁾は、訓練者による音声言語手掛りへの過度の信頼は、子供の応答に対する限定された刺激セットを生みだし、それゆえ、子供からの自発的な会話が生起しにくくなるだろうと述べている。そこで、Halleら¹⁾は、子供への援助を与えるのを遅らせ、子供の反応を待つという遅延法を提唱しており、Sosneら(1979)⁵⁾は、子供からの適切な言語反応が得られない時には、そうした訓練者による2次的な音声言語手掛りを用いなくて、直接的に必要な言語反応を提示することを提唱している。

しかし、このような行動の自発性の確立に関する

* 上越教育大学

問題は、先に述べたマンドの機能的な定義から考えて、要求言語行動の本質に係る問題であろうと思われる。そこで、自閉症児において、自己の欲求を他者に伝えるという要求伝達機能とそこで用いられる言語行動がどのようなプロセスを経て獲得されるのかを、話し手の先行条件に係る物理的環境要因と欲求充足者である聞き手の対応との関連で明らかにする必要があると思われる。また、個々の対象児に対する行動分析も充分に行う必要があると思われる。

そこで、以上述べた観点に立って、かなり豊富な言語行動はあるものの、その機能的な使用に問題を有する自閉症児の要求言語行動の分析を通して、機能的な言語行動を獲得させるための要因について次の2点より検討を加えた。

①言語的ニーズに係る物理的環境要因として、対象児が欲求対象物を自己充足出来ないかあるいは困難な状況を設定し、その環境統制の差異による欲求充足行動の変動とその反応型について検討する。②メディアーターとして、要求言語行動の生起に係る重要な要因であると思われる欲求充足者の対応を変数として欲求充足行動の変容について検討する。

II. 方 法

1. 対象児

実験開始時、7歳6カ月の自閉症もしくは自閉的傾向と診断された男児で、普通小学校情緒障害学級1年次に在籍する。諸検査の結果は、田中ビネー知能検査でMA 3歳11カ月。PVT (Picture Vocabulary Test) で、MA 3歳6カ月。津守式乳幼児発達検査では運動6歳6カ月、探索5歳、生活習慣4歳6カ月、言語5歳であった。

本児は、平仮名は50音を総て読め、ほぼ書ける。文章は拾い読みが可能で、単語あるいは短い文章を読んだ理解も可能である。2語文以上で、発話も可能であるが、特定のパターン遊び(“買物ごっこ”など)の中で自分の決めた手順に従って演じる母親とのやりとりや、絵本を見ながらの一方的な質問などがほとんどで、柔軟な相互交流的会話は極めて乏しい。乳児期は、手のかからない、反応に乏しい子どもであった。幼児期より他者の介入を嫌がる傾向が強く、回避的傾向も強い。従って、人の援助やほしい物を求めるといった要求言語行動にも乏しく、

どうしても独りでは出来ない時や嫌な場面から逃れたい時のみ、ほとんど一語文で要求する。また、日常生活内での事物の操作能力および理解能力は高く、普段の生活の中では自己の欲求をほとんど自分で充たすことが出来、困ることは少ない。

このように、本児は、かなり豊富な語いと統語的スキルを持っているにもかかわらず、その実際の運用においては限られた状況でしか用いず、しかもパターン化しており、言語の最も主要な機能である伝達的使用に乏しい子どもである。また、本児は、他者の働きかけに対して拒否的であり、自己の欲求のほとんどは自己充足でき、しかも動因は低いため、要求機能を持った伝達行動に対するニーズに乏しく、強化される事も極めて少ないと考える。

2. 観察場面：入口に面した壁面の中央に置いた戸棚(幅1.8m×高さ1.8m)以外には何もないプレールーム(8×5.5m)に、対象児と母親を行動上の制限のない状態で10分間置いた。戸棚の子供の手の届かない高さの棚には、本児が好む数種類の菓子、絵本、ブロックパズルを見えるように並べて置いた。

3. 実験計画：実験観察は、以下のように2期に分けて行った。

(1)第I期：母親の対応を一定に、物理的環境要因を操作して観察を行った。

A. 受動的対応期：母親を戸棚の側に立たせ、セッションの開始直前に実験者が、毎回以下の教示を与えた。

①子供からの自発的な働きかけを待ってそれに応じる。②退室に対する要求には「もう少し遊ぼうね」と言って、応じない。③要求があっても抱き上げて子供に対象物を取らせることはしない。④対象物は、1回の要求に対して1つずつ与えることを原則とし、菓子等は中身を母親が取り出して1つぶか少量ずつ与える。⑤他は、自然に子供からの要求に全て応じてやる。

B. 自己充足可能期：セッティングと母親への教示は前期と同じであるが、戸棚より約1m離れた位置に子供が持ち運び可能な重さの椅子を置いた。加えて、母親には、子供が椅子に乗って対象物を取ろうとしても自由にさせておくことを教示した。

(2)第II期：母親の対応を操作して観察を行った。

C. 即時対応期：受動的対応期と同じセッティン

グと教示に加え、以下の対応をすることを母親に教示した。

①子供をよく観察し、少しでも対象物に対する欲求行動か、あるいは要求行動と思われる行動（戸棚への接近や視覚的探索、母親を見る、母親への接近など）が観察された時には即座に対応する。即ち、②「どうれ」「なあに」とたずね、対象物が特定できる時にはそれを指差し、その名称を言っていたずね、棚から取って提示する。対象物が特定できない時は、これと思われる物を指差してたずね、棚から取って提示する。

D. 非即時対応期：戸棚正面より約5m離れた壁際に椅子を置き、母親を座らせ以下の教示を与えた。

①子供を見ないで雑誌を読んでもらいたい。
②子供からの何らかの明らかな要求行動があった時には、それに応じる。③要求を充たした後は、すぐにもとの椅子に戻り、再び雑誌を読む。

実験観察は、週1回、1セッション行った。各期の学習効果を考え、第I期の終了後2カ月において第II期の実験観察を行った。なお、第I期と第II期の

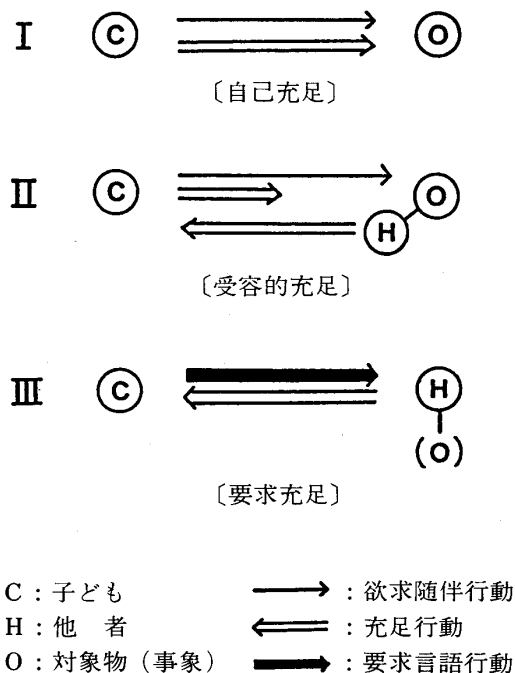


Fig. 1 欲求充足行動の行動型

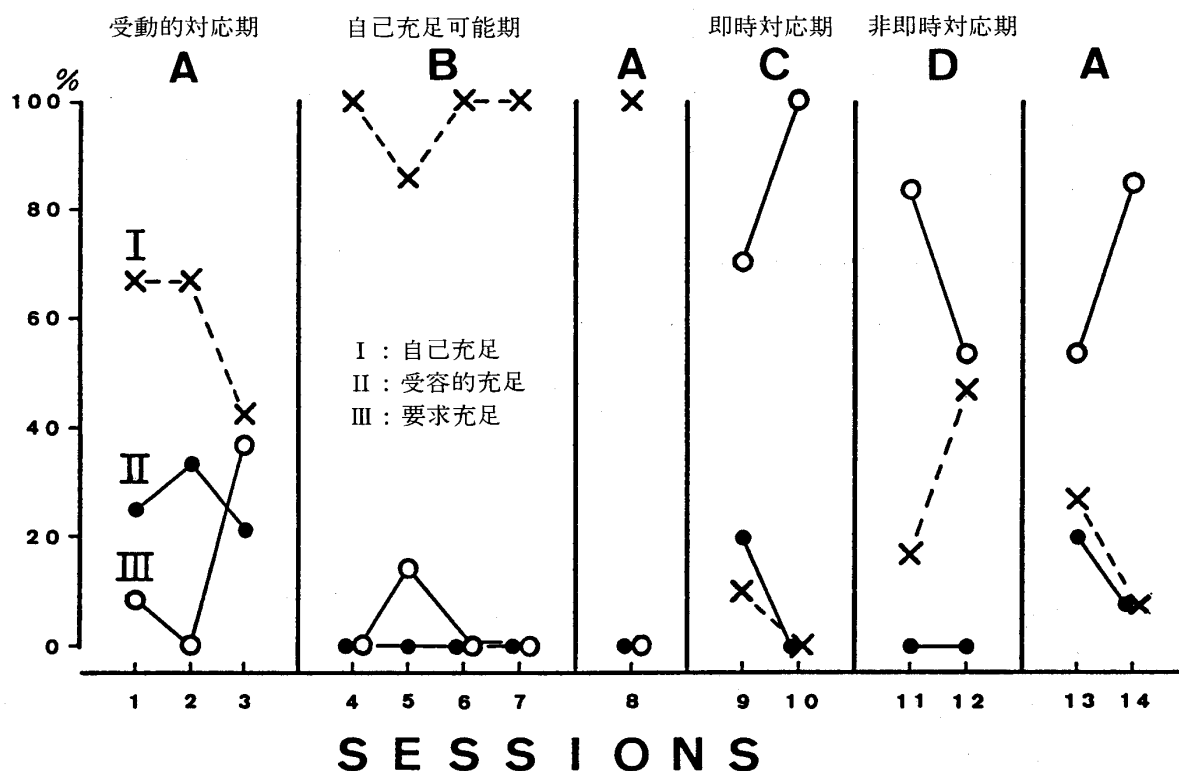


Fig. 2 欲求充足行動の各行動型の生起率

間に受動的対応条件で1回の観察を行った。

4. 記録と結果の整理

記録は、プレールーム内に装備された2台のビデオカメラと3本のマイクによって録画・録音した。それを基に、戸棚に置いた対象物に対する欲求充足行動についてイベント・レコード法によって整理を行った。また、実験者が、実験中に、隣室よりワンウェイ・ミラーを通して行動観察を行い、補助資料とした。

5. 分析

欲求充足行動の生起確率に係る操作要因としては、動因操作（摂取制限と飽和化）が考えられるが、臨床的実験観察においてはこのような操作は事実上不可能である。従って、本観察で見られる欲求充足行動の各セッションにおける生起頻度はその日の対象児の状態に依存していると考えられるため、本実験事態の統制要因を直接に反映している測度とは言い難い。そこで本実験観察においては、観察された対

象児の欲求充足行動をFig.1に示した行動型に従って分類し、充足行動の各レベルごとの占有率によって分析をおこなった（Fig.2）。

III. 結果

1. 第I期：受動的対応期および自己充足可能期

受動的対応期では、1、2セッションで自己充足行動が66.7%と高い値を占め、逆に要求充足行動は8.3%、0%と低い値を示した。しかし、3セッションでは、自己充足行動が42.1%まで減少し要求充足行動が36.8%に増加した。次に、1～3セッションについて、セッション内を前期・中期・後期の3期（各3分間）に分け、欲求充足行動の行動型のセッション内変動をみた（Fig.3）。

結果は、いずれのセッションにおいてもセッション後半で自己充足行動の減少を示すと共に、受容的充足かあるいは要求充足の増加を示した。

その他、母親が棚から対象物を取ってやろうとすると「自分で」「ダメ」と言って母親を押しつける行

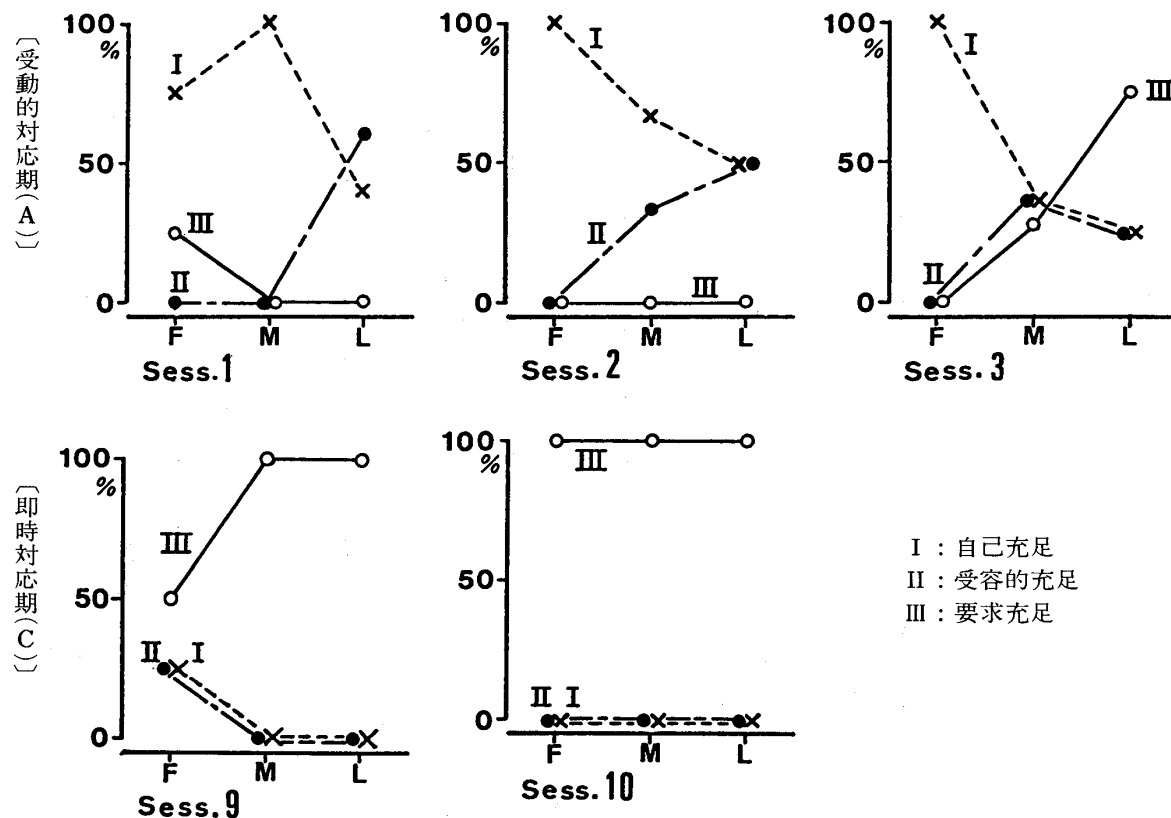


Fig. 3 セッションの前・中・後期における欲求充足行動の各行動型の平均生起率

動や対象物を手渡す前に母親からもぎ取ろうとする行動が、1セッション（計16回）および2、3セッションの前半（計4回および6回）に観察された。また、2セッションおよび3セッション後半では、要求はしないが母親が棚から対象物を取るのを待つ行動（1回および7回）、それから手を差し出し受け取る行動（1回および8回）、その時に「ありがとう」と礼をいう行動（それぞれ1回）が観察された。

受動的対応期で示された要求行動は、指差しやそれに伴う「これ」「こっち」「ちょうだい」の他、対象物の名称のみによる言語要求であった。

自己充足可能期では、受容的行動、要求充足行動とも0%、もしくは極めて低い生起率しか示さず、自己充足行動で占められた。

2. 第II期：即時対応期および非即時対応期

第I期終了後、約1カ月において行った受動的対応条件による1回の観察では、要求充足行動は生起せず、自己充足行動に終始した。また、第II期開始時の母親の報告では、第I期開始以前と比べて、顕著な言語活動における変化は見られなかった。

即時対応期の結果は、高い要求充足行動の生起（平均82.4%）と低い自己充足行動の生起（平均5.9%）を示した。セッション内変動を見ると、要求充足行動が9セッションの半ばより増加し、9セッション後半ではすべて要求充足行動で占められ、10セッションで100%を示した。（Fig.3）

9セッションでは、棚の対象物への欲求充足行動は10回観察されたが、3回目までは「自分で」「だめ」と言って母親を押しつける行動がみられた。しかし、4回目以降は指差しと共に「これ」と指示したり、物の名称を言って要求する行動が見られ、6回目以降の対象物の受け取り時には落ち着いて待ち、受け取ると必ず「ありがとう」と礼を言う行動が観察された。10回目には、読んだ絵本を母親のところに持って行き、「しまって」と要求する行動や、棚から離れた場所に座ったまま「おーい」と呼びかけ、そこから「ポテト」と要求する行動が観察された。10セッションでは、1回目よりスムーズに言語と指差しによって要求し、「イチ」と言いつつ欲しい数を指で示す行動、要求物と違う物を母親が取ろうとすると「それじゃない」と訂正する行動がみられた。10セッションの半ばに「～がいい」という表現が3回観察さ

れ、最期には床に寝たまま「～下さい」と要求する行動が観察された。

非即時対応期では、11セッション開始と共に自己充足行動が生起し、その後は母親を呼びに行き、棚を指差し、言語要求する行動が観察された。しかし、12セッションではジャンプして対象物を取ろうとする自己充足行動が46.7%に増加した。要求行動では「おかあさーん」と呼びかける行動が増加した。

次の受動的対応期では、13セッションで要求充足行動が53.8%とほぼ12セッションに近い値を示し、14セッションでは84.6%まで増加を示した。

IV. 考 察

1. 環境条件の物理的統制による充足行動の生起について

受動的対応期は、棚のすぐ側に母親が立ち、しかも容易には対象物を取れないという要求言語行動が生起し易いと思われる事態である。それにもかかわらず本児は、母親に対して容易には要求言語を発しようとはしない。また、椅子を導入するという自己充足が可能な、環境統制の弱い自己充足可能期になるとその傾向は一層顕著となり、ほとんど母親と交渉することなく自己充足行動を繰り返した。この結果から推察するに、環境統制の更に緩やかな日常生活においては、ここで見られる以上に、余程の嫌悪事態かあるいは母親が無理にでも介入しない限りは自発的に要求言語行動を発することは少ないであろうと思われる。しかし、受動的対応期を見ると、僅か3セッションにもかかわらず受動的な事態に置かれることによって本児の欲求充足行動とそれに関連する行動に変容が見られた。即ち、要求充足行動の増加傾向と、母親の介入に対する拒否的態度からそれを受け入れる態度への変容であった。この変容に係る要因としては、母親の援助を必要とする環境的要因の他に、そこで行われた母親の対応に関する要因が考えられる。こうした対応によって、欲求充足場面において母親が何等かの機能的役割を獲得したとも考えられる。

2. 母親の対応による充足行動の変動について

即時対応期で母親は、子供が何等かの欲求充足行動を示した時、即座にそれに対して対応することを要求された。その結果、即時対応期では受動的対応

期を上まわる敏感な変容を示した。即ち、1セッション目よりスムーズで自発的な要求充足行動への移行と、それに関連した母親への応対行動に変容を示し、そこで観察された言語行動も微妙な広がりを見せ、対象児にとって母親の機能的役割が変化したことを示唆する言動が見られた。

しかし、母親が棚から離れ、本児からの要求に全く依存した非即時対応期に移行すると、最初のセッションではかなり高率に母親への要求充足行動が見られたものの、次のセッションでは自己充足行動の増加が見られた。この結果は、要求充足行動が未だ不安定であり、先期の即時対応を十分に繰り返す必要を示唆するものであろう。

また、13、14セッションの受動的充足条件の結果は、1～3セッションおよび8セッションでの同条件に比べて明らかな差を示している。これは、第Ⅱ期開始以降の学習によって母親が既にメディエーターとしての機能をかなり獲得した可能性を示唆するものであろう。このことは、13セッションで自己充足行動が見られたものの、母親の介入に対する拒否的言動はなく、スムーズな受け入れと共に多様な言語的働きかけを示したことからも推察される。

ここで行った一連の実験的観察は、母親に、日常生活での本児に対する接し方について具体的にその方法を体験させるという臨床的目的も含まれていた。その結果、母親の対応の差によって本児の反応が変容するに伴い、母親自身の子供の見方、接し方にも変容が見られた。母親は、以前はかなり統制的に接するか逆に保護的に接していたのが、日常生活においても本児の行動を予測し、余裕を持って対応出来るようになったと報告している。特に第Ⅱ期の終了時点では、家庭および学校においても母親や担任に対してさかんに要求言語行動を発するようになったと報告された。また、セッション中にも観察されたように、言語レパートリーも物の名称のみといった一語文だけでなく、二語文以上の、しかもバラエティーに富んだ内容で、またマンドのみならずタクトの増加も報告されている。

以上の欲求充足行動の分析から、機能的な要求言語行動を形成する為の主要な要因として次のようなことが考えられる。

自己充足行動から要求充足行動へと移行する過程

においては、Fig.1の第Ⅱレベルの他者による受容的対応経験が非常に重要であると思われる。即ち、まず環境条件を整え、欲求対象を統制することによって子供のニードを高め、そこで示す子供の欲求行動を他者が的確に捉え、即時に対応する事が必要であると思われる。Halleら(1981)¹⁾も、遅延法が、新しく獲得された、まだ充分には確立していない行動に対して用いられる時には問題が生じると述べているが、要求言語行動を確立するためには、まず充分な第Ⅱレベルの体験を繰り返すことが必要であろう。また、そのような過程を通して、メディエーターたる他者が2次性の強化因としての機能を持ち、同時に、欲求充足事態において充分に要求行動を発現させ得る弁別刺激としての機能を獲得することが重要であると思われる。以上のことから考えて、多くのプログラムでは音声言語行動の基礎的行動型を形成した後に改めてその行動の機能化を図るという手順を用いているが、音声言語行動の基礎的行動型の形成と同時に、要求伝達機能の形成を計る必要があると思われる。

ここで得られた知見を一般化するには、より多様なレベルの言語遅滞を持つ自閉症児についての検証が必要であろうが、その方向性は示唆されたものと考ええる。

〈謝 辞〉

本論文をまとめるにあたり、御指導下さいました筑波大学心身障害学系、小林重雄教授に深く感謝致します。

文 献

- 1) Halle,J.W., Bear,D.M., & Spradlin,J.E.(1981): Teacher's generalized use of delay as a stimulus control procedure to increase language use in handicapped children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 14, 389-409
- 2) Hart,B. & Risley,T.R.(1975): Incidental teaching of language in the preschool. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 8, 411-420
- 3) Skinner,B.F.(1957): *Verbal behavior*. Prentice-Hall, Inc,Englewood Cliffs, NJ
- 4) Rogers-Warren,A. & Warren,S.F.(1980): Mands for verbalization; Facilitating the display of

newly trained language in children. Behavior Modification, 4,361-382

- 5) Sosne,J.B., Handleman,J.S., & Harris,S.L.(1979): Teaching spontaneous-functional speech to

autistic-type children. Mental Retardation, 17, 241-245

- 6) Winokur,S.(1976) 佐久間徹・他訳 (1984) : スキナーの言語行動理論入門、ナカニシヤ出版。

A STUDY ON SHAPING "DEMAND BEHAVIOR" IN AN AUTISTIC CHILD

YOSHIHIRO FUJIWARA

(Joetsu University of Education)

The objective of this study was to examine the factors which shape "demand behavior" in an autistic child who was poor in functional speech skills.

The external environment and the mother's responses to the child's behavior to obtain his desired objects were set up as independent variables. The conditions were as follows:

1. Manipulating the external environment.

A. The child's favorite objects were placed in view out of reach on a shelf. The mother stood beside the shelf and gave the child an object when he tried to reach at it.

B. The setting was the same except a chair was placed in front of the shelf so the child could reach the objects.

11. Manipulating the mother's responses.

C. The mother gave her child the desired object more instantly than in condition "A" if he looked at the shelf or came close to the shelf.

D. The mother was sitting on a chair and reading some magazines and only gave the desired object when she was asked.

It was suggested that the establishment of "demand behavior" in autistic children requires not only the motivation provided in condition "A" but also the experience provided in condition "C".

The function of the mediator was discussed with regard of the shaping of "demand behavior".